

平成 29 年 9 月 17 日

平成 29 年度 第 3 回「お話（素話）を学ぶ」報告書

1. 日 時 平成 29 年 9 月 15 日（金）14：00～17：00
2. 場 所 ヴィアックス研修センター鳩山ビル 6 F
3. 参 加 者 19 名（1 名欠席）
4. 配布資料 ①第 3 回児童部会次第
②第 2 回児童部会議事録
5. 課題図書 『レクチャーボックス お話入門 1 お話とは』

6. 内 容

(1) 事務局より、以下の点について説明があった

- ① 「お話を学ぶ」（お話（素話）についての知識を深める）（お話（素話）を語る力と、聴く力を育てる）
- ② 第 2 回までの『お話とは』について

(2) A～E の班に分かれ、参考図書 P. 58～p. 76（「語る事によって育つ語り手」まで）を読んで話し合い、発表を行った。以下、各グループの発表内容である。

A 班

- ・「語り」は、絵本を読むこと以上に、子どもとの距離が近く感じられる。
- ・子どもの反応が見られる。
- ・声が届く範囲なら、文字が読めなくても楽しめる。
- ・語りでお話の印象が変わる。

疑問・本番でお話がとんでしまったらどうするか。

→よく練習してもあることなので、仕方ない。慌てず対処する。

B 班

- ・くりかえし→耳から入ると面白さを感じる。
- ・想像する楽しさがある。
- ・他者との関係。共感できる。
- ・よい聞き手に助けられる。
- ・絵に限定されずお話の中に入れる。
- ・落語に近い。

C 班

- ・道具に頼らず、ひとりで出来る。
- ・お話を覚える事で、聞き手の反応を楽しめる

- ・くり返しのある話は子どもが喜ぶ。
- ・表情・身ぶり・声色などが落語と違うか。

疑問・お話を語る時、どこまで身ぶり手ぶりや声色を変えるか。

→自然に出る身ぶりや手ぶりならよい。

(参考図書『お話を語る (たのしいお話)』松岡享子 日本エディタースクール出版部 1994)

D班

- ・お話は、何もないところから創り上げるだいご味がある
- ・ローコストハイリターン。
- ・リアルな世界を知らない幼い子の方がその世界に入っていける。
- ・連帯感が生まれる。お話会という場が大切。
- ・活字から自分の世界へ。
- ・語り手にとっても素晴らしい。

E班

- ・「ちっちゃいちっちゃいちっちゃい」等くり返しを子どもは喜ぶ。
- ・聞き手のダイレクトな反応。
- ・読み聞かせと違い、小さな反応もよく伝わる。
- ・耳だけで楽しむことの良さがある。
- ・暗譜しての演奏に近い。
- ・語り手に合ったテキストを選ぶことが大事。

(3) 語りの時間

『おいしいおかゆ』 発表者：K (E区立図書館)

(4) A～Eの班に分かれ、参考図書P. 77～p. 89 (「図書館でこそお話を！」まで)を読んで話し合い、発表を行った。以下、各グループの発表内容である。

A班

- ・物語を語り継ぐ体験として重要。
- ・話を聞いてその本へ興味をもつ。(J君の例のように)
- ・図書館の役割が大事。

疑問・口演童話とは？

→明治時代後期に始まったもので、昔話や児童文学作品を子どもたちに話して聞かせていた。

巖谷小波などが有名。

B班

- ・語られたお話を借りて行くことが多いのは、本への興味を育てるから。
- ・明治期に分かっていたお話の意義は今でも変わらない。

- ・娯楽が多様化し、親が語らなくなった。その分、図書館の役割が大きくなった。

C班

- ・耳からの読書の力。
- ・おはなし会では絵本と素話。どちらかという絵本の方が借りられている。
- ・相手の事を知ること。「あの人なら」という信頼関係が大事。

D班

- ・耳からの読書から目からの読書への流れを定着させたい。
- ・お話を語り継ぐことは現代では難しいとされるが、体験させたい。
- ・おはなし会での素話が大事。
- ・お話を聞くことは読書習慣へとつながる。

E班

- ・6つの意義は、よく語られ場合、良く聞かれた場合に実現する。
- ・おはなし会の常連さんが大きくなると来なくなり、低年齢化している。お話を体験させたい。
- ・子どもころ話を聞いて図書館に行くようになった。今その図書館で自分もお話を語っている。
(お話の持つ力の事例)

(5) 語りの時間

『なまくらトック』 発表者：J (事務局)

7. 所感

・児童図書館員としてお話の面白さを伝え、子どもとの信頼関係を構築する為にもお話をを行うことはとても重要なことだと再確認できた。より多くの子ども達にお話を味わってもらう為にも努力していきたい。

以上